

# 明治期の旧篠原家

## — 店卸帳から見る変遷 —

The Former Shinohara Family in the Meiji Period  
— Transition as considered from the Inventory Book —

稲葉 友紀 INABA Yuki

### 要 旨

旧篠原家住宅は、栃木県宇都宮市にある国指定を含む重要文化財建造物である。醤油醸造販売・肥料販売などを生業とした豪商の家であり、その立派な木材や地元の建材を使用した重厚な建築が、多分に評価されている。その一方で、旧篠原家を歴史的観点から研究した例は無いに等しい。

本稿ではその背景を少しでも明らかにすることを目的に、旧篠原家にて保管されていた多くの資料の中から、明治期の店卸帳の解説を試みた。各項目の金銭動向を追い、当家の変遷を探るとともに、当時の経済状況などと照らし合わせて多角的な分析を行う。

その結果見えてきたのは、近代経済の激動に吞まれながらも、創意工夫を凝らし資産を増やし続けた旧篠原家の姿であった。

## 1. はじめに

旧篠原家住宅は、栃木県宇都宮市今泉1丁目に建つ国指定を含む重要文化財建造物である【図1】。現在のJR宇都宮駅北西を通る旧奥州街道沿いに面し、かつては醤油醸造・肥料販売を生業に、宇都宮市屈指の豪商として知られた。第二次世界大戦時の空襲にて、屋敷の大半は焼失したが、主屋と石倉3棟が辛うじて残り、平成8(1996)年に宇都宮市へ寄贈され、現在に至る。

平成7(1995)年11月27日付けで上記4棟が市指定有形文化財、平成12(2000)年5月25日付けで主屋・新蔵(附 南北石塀)が国指定重要文化財に指定された。また、平成30(2018)年には、日本遺産「大谷石文化」の構成文化財にも加えられている。

さて、近年は「日本遺産」や「歴史文化基本構想」など、文化財を点(単体)ではなく面(ストーリー)で捉えようという動きがある。文化財単体としての保存・活用のみならず、地域の歴史・風土・文化といった特色を軸に、文化財をまちづくりや地域活性化に活かしていくことを目的に据えた方策である。

市の掲げるこれらの方策における<sup>[1][2]</sup>旧篠原家住宅の立ち位置は、押しなべて「大谷石を使用した歴史的建築」となっ

ている。これは偏に、当建造物の重要文化財指定の評価観点が建築的価値に基づくものであるからである。立派な材木や地域素材である大谷石をふだんに使用した重厚な建築も、それらが戦時下の宇都宮空襲にて焼け残ったという歴史的希少性も、旧篠原家住宅を語る要素としては欠かせない。その前提こそあれ、果たして建築的価値のみがこの文化財の魅力なのだろうか。

旧篠原家は、先にも述べた通り、豪商として宇都宮市で名を馳せてきた。その資産をあってこそその建築であるが、これまで商業的・歴史的背景を軸に旧篠原家住宅を研究した例はない。そもそもの傾向として、宇都宮市の商業史に言及した研究が数少なく、近世の衣料品流通を取り上げた寺内由佳氏の研究<sup>[3]</sup>が、最も本稿が目指すところと最も近似した内容といえるだろう。

旧篠原家には、多くの歴史的資料が現存している。

本稿ではその中から、明治期にあたる店卸帳を取り上げ、当時の金銭動向を歴史的観点から分析していく。

## 2. 研究対象と分析方法

店卸帳は、決算または在庫品の整理などのため、手持商品・原材料・製品・設備・什器・土地・建物などの諸資産の種類・数

量・価格を明細に記した目録<sup>[4]</sup>を指す。

宇都宮市教育委員会文化課が管理する「旧篠原家住宅所蔵目録」の中には、計4冊残されており、年代順に以下の通りである(〈〉内は目録登録番号)。

- ・『安政5年 店卸帳』〈主屋6-5-3〉
- ・『弘化5年 店卸帳』〈主屋6-5-2〉
- ・『慶応4年 店卸帳』〈主屋6-5-5〉
- ・『明治33年 店卸帳』〈主屋6-5-4〉

本稿では、『慶応4年 店卸帳』【図2】及び『明治33年 店卸帳』【図3】の明治年間分を、分析対象とした(欠落年：明治4年、明治38年～42年、44年)。

一貫して、上段に金額・下段に項目及び関連する備考が記録されており、それらを解説の上、Excelのグラフ作成や数値計算を用いて通時的変化を視覚化した。

各項目の金額推移傾向や特徴をまとめつつ、自治体史を参考に、歴史との関係性(共時性)も推察していく。

### 3. 分析

前段階として、店卸帳全体を通して共通する、両から円への単位変更について触れておく。

貨幣の単位は、明治4(1871)年8月に明治新政府によって公布された「新貨条例」によって定められ、従来の両分朱から、十進法を基にした円銭厘へと変遷していった。

旧篠原家では、明治8(1875)年頃から、一部項目にて新単位での金額記載が始まり、同10(1877)年には、ほぼ全ての項目が新単位へと移行している。

明治期は日本経済史において重要な時期であり、版籍奉還と廃藩置県による封建社会の崩壊と資本主義経済の発達という激動の時代にあたる。そのため、新貨条例のみならず、当時起きた経済変動や政策とも照らし合わせて、店卸帳を分析する必要があるだろう。

それを踏まえた上で、金銭動向が特徴的かつ歴史的な背景がうかがえた3項目を取り上げていく。

#### 3.1 総資産

ここでの総資産とは、各年度の決算終わりにて算出・記載されている総額のことを指す。グラフとして表したものが【図4】である。後期に多い欠落部分は推察する他ないものの、旧篠原家の総資産額が右肩上がりであったことは明白である。

この傾向は、明治期の記録として非常に興味深いもので

ある。

先に述べたように、明治期はまさに日本経済の過渡期であった。華々しい成長を遂げる一方で、大きな停滞も起きており、その代表格が「松方デフレ(松方財政)」である。

松方デフレとは、明治14(1881)年、当時大蔵卿であった松方正義が打ち出した財政政策を指す。西南戦争での戦費調達によって生じたインフレを解消するという当初の目的を果たした一方で、社会全体に物価低下をもたらし、結果として、商家の収入減少や農家の生活への打撃へと繋がった。

全国的に広がったこの政策の影響は、当然のことながら栃木県内にも及んでおり、『栃木県史 通史7』にある明治前期の経済概況には、デフレ期間にあたる明治16(1883)年から同20(1887)年までの様子が、以下のように記されている<sup>[5]</sup>。

“紙幣漸ク原価ニ復スルニ從ヒ、物価次第ニ低落シ、金融益々逼迫ヲ告ゲ、為メニ民間警醒ノ心ヲ起シ、稍々勤儉ニ注意スルニ至ル”

さて、このようにこの時期の経済は激動そのものであり、松方デフレ、ひいてはその後の戦争に伴う不況など、商家にとっては非常に不利となる展開が多発した。しかし、その状況下においても旧篠原家が着実に資金を伸ばし続けていったのは、先述の通りである。

資金を増やし続けられた要因は何か。

その答えは、他の項目を読み解き掛け合わせることで見えてくるに違いない。

#### 3.2 大黒帳系統

ここでは「大黒帳」「大宝恵帳」「貸金帳」と名称を変えながら記され続けてきた項目を、「大黒帳系統」としてまとめ、統計・分析している。

具体的な時期区分は、以下の通りである。

- ・大黒帳：慶長4(1868)年～明治11(1878)年
- ・大宝恵帳：明治12(1879)年～同15(1882)年
- ・貸金帳：明治16(1883)年～同45(1912)年

これらは旧篠原家が使用していた商業帳簿の一つ「覚え帳」として機能していた。つまり、備忘録かつ商家の売買金高を記していたと考えられる。

その推移を図表化したものが【図5】である。

なお、明治16(1883)年から4年に渡って「貸金帳」の隣に「高橋懸り」という項目が記されており、そちらも含めて算出していることを付記する。この高橋某という存在についての明記は無いが、同時期である明治22年・23年に古金金物の

項にて、高橋廣吉という人物が登場しており、同一人物である可能性が高い。旧篠原家がこの人物から古金の買入を行っていることから、当時、古物商・質屋を生業にしていたのだろう。しかし、確証はないためここでは深掘りしないものとする。

さて、この項目からは主に2つの動向が読み取れる。

1つ目は、総資産でも触れた、松方デフレの影響による下落である。明治16年から同20年にかけて落ち込み、その後回復していることから間違いないだろう。

この物価の変化が表れている点や、他の帳簿類に比べ、記録されている金額の大きさが桁違いである点を踏まえると、これらの帳簿が、旧篠原家が営んでいた醤油・肥料の販売売上を扱ったものであったと推察できる。

2つ目は、明治後期の急落である。欠落年があるため明言はできないが、おおよそ明治37(1904)年のピークを境に、記載金額が大幅に減少している。先述の通り、貸金帳が商品販売に関する帳簿であるならば、この金銭動向が示すのは大きな不況、もしくは事業縮小である。

小松俊雄氏の記した、旧篠原家住宅が一般公開される際に行われた整備過程の記録の中に、興味深い聞き取り内容が載っている。<sup>[6]</sup>

“大正に入ると、醤油の醸造は主な生業ではなくなり(戦前に店に関係した人の話では全く醤油が売れない日も結構あったという)、肥料販売に伴う小作の収入が膨大なものになっていった。醤油の醸造に関しては、昭和に入ってからでも伝統的な手作りの方法をとっていたため、醤油の質や味は大変に良いものの金額が高めだったという。また宣伝もほとんど行われず(現在残っている看板は、皆肥料販売のものである)、市内の高級旅館が樽で買っていくのが一番のお得意様であったという。”

大正時代の様子ではあるものの、転換期と考えられる明治37年に、4代・友吉から5代・友右衛門への家督相続が行われたことを踏まえると、明治末期から事業縮小の流れがあってもおかしくはない。

以上の点から、旧篠原家は生業である醤油醸造販売などで利益を出していたものの、不況の煽りや事業の縮小などの影響を強く受けていたことが分かる。同時に総資産の動きから明治末期まで、当家の資産を増やし続けていた要因が他にあることも明示している。

### 3.3 肥料貸金

明治24(1891)年以降、「肥料貸金メ」という項目が現れる。

ここでは、それ以前の「糠貸メ」「粕糠干鰯貸メ」の表記も含め、肥料貸金としてまとめた。

まとめるに至った根拠としては、まず「メ」表記がある点が挙げられる。「メ」とは合計した高(総計)を指すため、貸金帳とは別に記録された肥料貸金帳簿の決算が、この項目にあたる可能性が高い。

次に、表記の変遷である。帳面では先述した通り、糠から干鰯、肥料と書き方が変化している。明治32(1899)年により散見される過磷酸石灰の在庫記録も含め、これは黒川計氏の書籍<sup>[7]</sup>で確認できる販売肥料の変遷に類似している。よって、旧篠原家は小売業として肥料販売を行い、糠・干鰯(メ粕)・過磷酸石灰とその時々需要に基づいて仕入れを変えていたと推察し、一括にまとめた。

その結果のグラフが【図6】である。

最初に「糠貸」の表記が登場した明治5(1872)年以降、細々と販売をしている様子であったが、「粕糠干鰯貸メ」と記された明治22(1889)年から金額が着実に増加していく。しかし、明治32(1899)年にピークを迎えた後は、増減しつつも明治37(1904)年を境に大きく金額を落としている。

金銭動向として、上昇を始めているのが明治22年である点から、松方デフレの影響を受け、従来の醤油醸造販売に頼らない新たな事業の展開を模索した結果であると考えられる。

また、大きな下落の一つが過磷酸石灰の購入があった年に起きていることから、干鰯から過磷酸石灰へと扱う商品を変えた影響が出た可能性が挙げられる。肥料史と照らし合わせてみると、旧篠原家における魚肥や化学肥料の導入は世間より一足遅れていたようであるからして、業界に大きく参入することは難しかったのかもしれない。この点については推測の域を出ないが、もう一つの下落年である明治37年は、言うまでもなく家督相続が関連していると思われる。

### 3.4 土地

土地に関する項目を各年度で合算し、図表化・一覧化したものが【図7】及び【表1】である。

土地に関する項目は初期から登場する。しかし、当初は「旧畑質地」としての資産のみであり、動きが見え始めるのは明治10(1877)年からである。山の買入を皮切りに、徐々に屋敷代なども見受けられるようになる。

明治19(1886)年頃からは、土地の種類や取引した人物の名前など、細かな記録が行われるようになった。今までの買

入高を記載し、新たな買入分を取引順に書く形式である(買入高は前年の合算値とほぼ毎年一致)。買入額は後期になるにつれ膨らんでおり、欠落年こそあれ、特に明治37(1904)年以降の伸び具合は尋常ではない。

この土地買入が始まった契機もまた、松方デフレであると考えられる。明治18年頃、デフレ進行によって引き起こされた農村の貧困化や米価の暴落、地租滞納によって、土地公売処分が行われるようになった<sup>[8]</sup>。

この公売された土地が、裕福な農民や借金の抵当流れて高利貸等資本家の手に渡っていくようになり、旧篠原家も、その流れの中で多くの土地を持つようになったわけである。

5代・友右衛門は家督相続前(真一郎時代)より土地管理を行っていたことが、目録内の土地台帳などから推察される。商家より地主の色が強くなっていった背景には、世の情勢や自身の経験を踏まえた決断があったのかもしれない。

以上が、金銭動向から分析できる要素である。

これだけでも興味深いものではあるが、もう1点の特徴的な動きとして、宇都宮停留所拡張に伴う土地の売渡にも触れておきたい。

この停留所は現在のJR宇都宮駅にあたり、大宮―宇都宮間の建設工事によって、明治18(1885)年に開業した。県庁移転に続く大事業であったこともあり、文明のシンボルとして当時の宇都宮町の賑わいに大きな影響を与えたの言うまでもない。その大反響もあってか、数年が経過する頃には停留所の拡張を余儀なくされた。

店卸帳内を確認すると、明治28(1895)年に「畑7筆」、翌29年に「竹林山林■寄畑地」を日本鉄道会社に売渡している。以上計1,214円分に加え、「上川又斎藤茂太」の「山林3筆」と「家利三郎」の「宅地」が売渡分として記載されている。駅から東方に少々離れた「大字平出」に「構内線路敷地トシテ」と明記されていることから、車庫や枝線の土地として充てられた可能性が高い。

『宇都宮駅100年史』<sup>[9]</sup>発行時点では、この第1次構内拡張による拡張面積や数量などといった資料は見つかっていないとある。仮に、この店卸帳の記載を基に土地台帳などと照会することができれば、旧篠原家が提供した買入地の範囲については、解明に至れる可能性がある。

さて少々話は逸れたが、松方デフレの不況と家督相続という転換期によって、旧篠原家は商家から近代資本家兼地主としての立ち位置を確立していくこととなったことが分かるだろう。結果として、この土地の買入高が、総資産を増

加し続けた要因であると結論付けられる。

## 4. 総括

今回の店卸帳分析を通して見えてきたのは、明治期の日本経済の激動に吞まれながらも、創意工夫を凝らし資産を増やし続けた旧篠原家の姿だった。

「総資産」が「土地」と同様右肩上がりであるのに対し、醤油・肥料の販売を記録していたであろう「大黒帳系統」や「肥料貸金」が明治後期に金額を落としていることから、「商家としての旧篠原家」が明治末期には既に縮小しつつあったことがうかがえる。特に、家督相続後にその傾向が顕著であることから、5代・友右衛門が事業転換の舵を切ったことはほぼ間違いない。

つまり、明治の激動の45年は旧篠原家に「商家」から「近代資本家兼地主」というスタンスの転換をもたらしたわけである。

4代・友吉による、肥料販売という新たな事業の展開及びデフレに伴う不況の対策としての土地の買い入れ、鉄道敷設などの事業への積極的な貢献を下地に、友右衛門が大きく地主事業を展開した。その根底には急激に変化する日本経済への対応というやむを得ない事情があり、見事順応したことで莫大な資産を築いたと考えられる。

奇しくも、戦後の農地改革によって、その増大した土地を手放さざるを得なくなり、空襲によって商いにも大幅な痛手を負った旧篠原家は終焉を迎えることとなった。しかし、当時土地の買い入れを行う選択をしていなければ、松方デフレの影響により商売が立ち行かなくなり、商家として早々に衰退していた可能性があったことも、また事実である。店卸帳は、そんな明治期の旧篠原家の変化と発展を明確に示す史料となっていた。

店卸帳には、醤油醸造に用いられた設備用品や、旧篠原家の人々が使用していた生活用品、東京・銚子との関わりを示唆する項目など、まだ考察できる要素が多く残されている。他の史料と掛け合わせることで、より当時の旧篠原家及び宇都宮市の状況を掘り下げることが可能だろう。

加えて、『旧篠原家住宅所蔵目録』も未だ解読・分析が進んでいない貴重な史料群である。今後の調査によっては、当時の商家の在り方・生活だけでなく、宇都宮市の情勢や商業についての新たな裏付けや発見が見込まれる。建築学だけでなく、歴史学や民俗学といった側面からも多角的に分析す

ることが、今後の旧篠原家住宅の文化財的価値を高めることに繋がるに違いない。

是非とも今後の研究・分析の発展に期待したい。

#### 参考資料

- ・『栃木県史 通史編6』
- ・『栃木県史 通史編7』
- ・『宇都宮市史 第7巻』
- ・文化財保存計画協会 編(1996)『宇都宮市指定文化財 旧篠原家住宅保存調査報告書』宇都宮市
- ・宇都宮市教育委員会(2018)『国指定重要文化財 旧篠原家住宅解説書』宇都宮市教育委員会
- ・黒川計(1975)『日本における明治以降の土壤肥料考(上巻)』『日本における明治以降の土壤肥料考』刊行会
- ・山口和雄(1982)「倉見屋八左衛門家店卸帳の分析」／『創価経営論集第6巻第1号』pp. 27-45
- ・日本国有鉄道宇都宮駅編(1985)『宇都宮駅100年史』
- ・小松俊雄(1998)「旧篠原家住宅とその整備について」／下野民俗研究会『下野民俗第38号』pp. 7-24
- ・寺内由佳(2022)『近世の衣料品流通と商人：地方都市宇都宮を中心に』山川出版社

---

<sup>[1]</sup> 日本遺産「大谷石文化」公式ホームページ／構成文化財／旧篠原家住宅

<https://oya-official.jp/bunka/culturalassets/kyushinoharake/>  
【2025/01/31 最終閲覧】

<sup>[2]</sup> 宇都宮市公式webサイト／イベント・文化・スポーツ／歴史・文化財／歴史・文化に関する基本計画等／宇都宮市歴史文化基本構想

<https://www.city.utsunomiya.lg.jp/index.html>  
【2025/01/31 最終閲覧】

<sup>[3]</sup> 寺内由佳(2022)『近世の衣料品流通と商人：地方都市宇都宮を中心に』山川出版社

<sup>[4]</sup> 『広辞苑 第4版』岩波書店 p. 1,603 「棚卸し・店卸し」内「棚卸表・店卸表」より。店卸帳と同義と判断し引用。

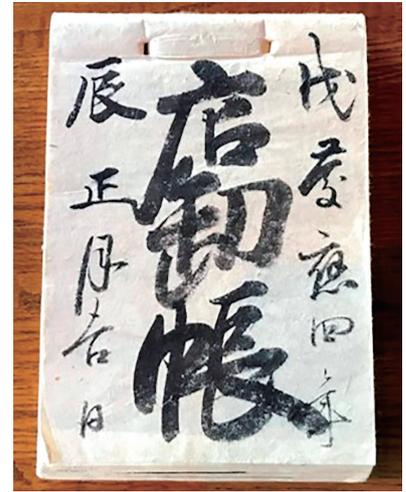
<sup>[5]</sup> 『栃木県史 通史編7』pp. 28-29

<sup>[6]</sup> 小松俊雄(1998)「旧篠原家住宅とその整備について」下野民俗研究会『下野民俗第38号』pp. 7-24より引用

<sup>[7]</sup> 黒川計(1975)『日本における明治以降の土壤肥料考(上巻)』『日本における明治以降の土壤肥料考』刊行会

<sup>[8]</sup> 『栃木県史 通史編6』pp. 390-391

<sup>[9]</sup> 日本国有鉄道宇都宮駅編(1985)『宇都宮駅100年史』

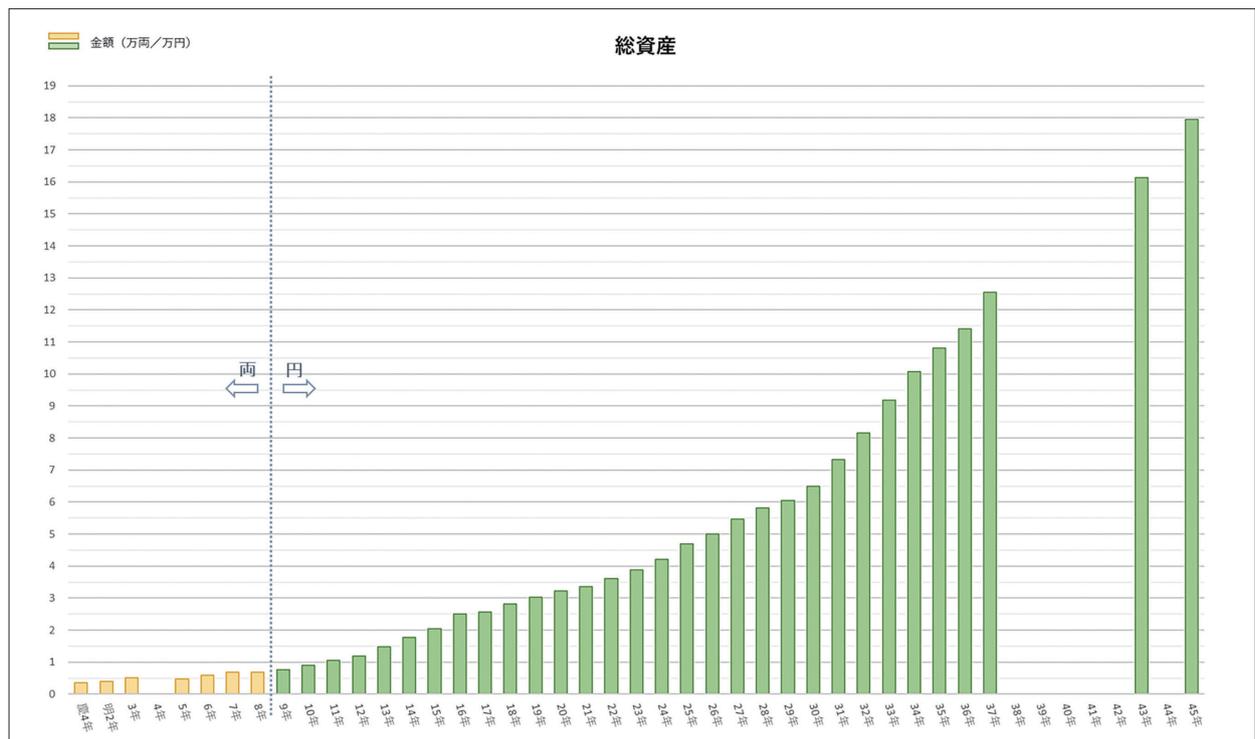


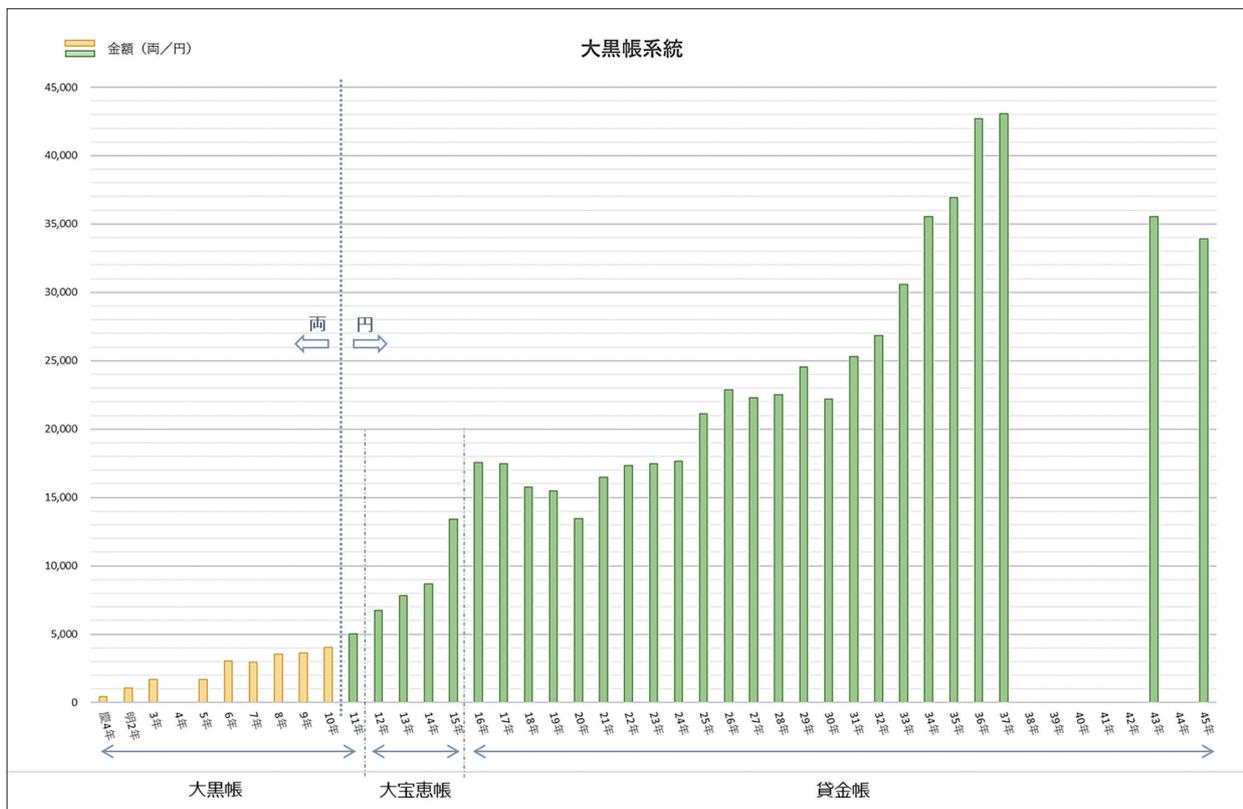
【図1】明治30年の主屋  
国指定重要文化財 旧篠原家住宅解説書より(上)

【図2】『慶応4年店卸帳』(右上)

【図3】『明治33年店卸帳』(右下)

【図4】総資産(下)

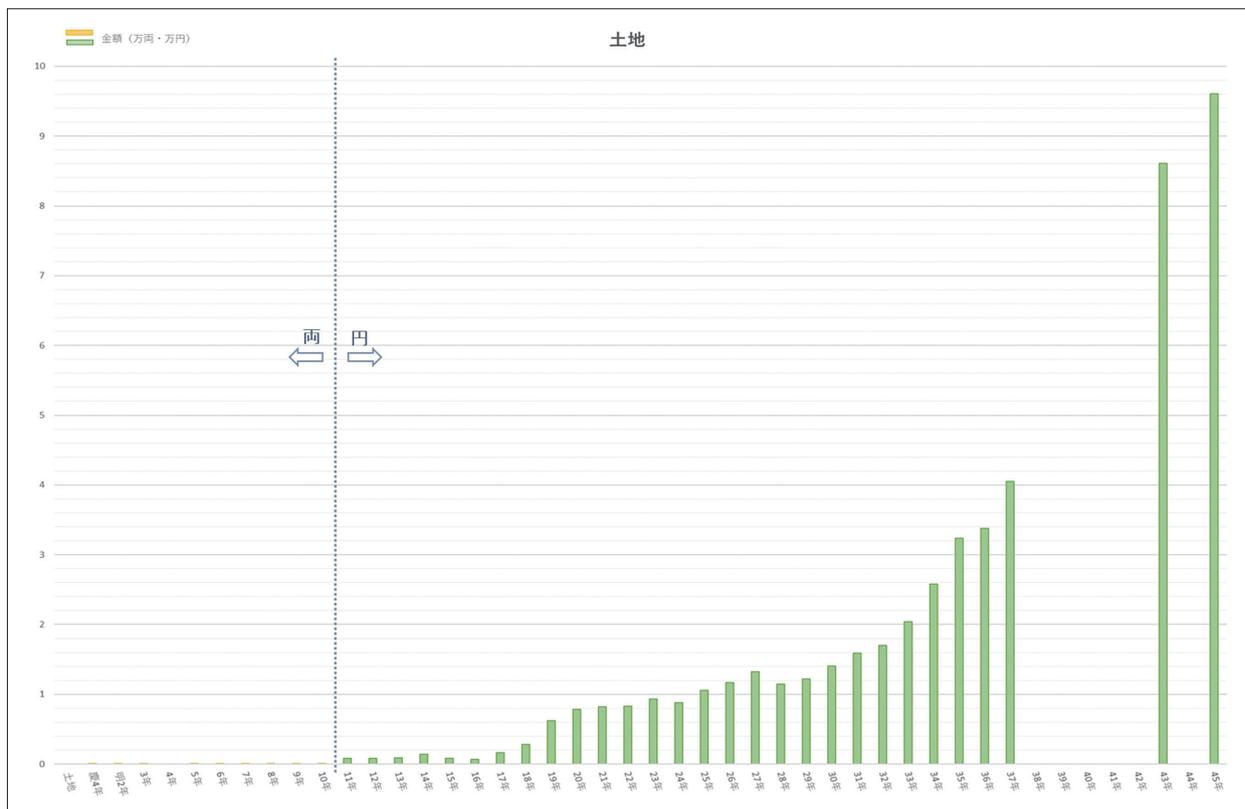




【図5】大黒帳系統



【図6】肥料貸金



【図7】土地 グラフ

| 土地  |       |     |        |
|-----|-------|-----|--------|
| 慶4年 | 6     | 24年 | 8,790  |
| 明2年 | 6     | 25年 | 10,559 |
| 3年  | 6     | 26年 | 11,659 |
| 4年  |       | 27年 | 13,223 |
| 5年  | 6     | 28年 | 11,486 |
| 6年  | 2     | 29年 | 12,191 |
| 7年  | 2     | 30年 | 14,051 |
| 8年  | 2     | 31年 | 15,892 |
| 9年  | 2     | 32年 | 17,033 |
| 10年 | 102   | 33年 | 20,434 |
| 11年 | 802   | 34年 | 25,773 |
| 12年 | 802   | 35年 | 32,408 |
| 13年 | 902   | 36年 | 33,787 |
| 14年 | 1,402 | 37年 | 40,516 |
| 15年 | 802   | 38年 |        |
| 16年 | 702   | 39年 |        |
| 17年 | 1,641 | 40年 |        |
| 18年 | 2,833 | 41年 |        |
| 19年 | 6,234 | 42年 |        |
| 20年 | 7,827 | 43年 | 86,081 |
| 21年 | 8,186 | 44年 |        |
| 22年 | 8,258 | 45年 | 96,086 |
| 23年 | 9,297 |     |        |

【表1】土地 数値表